

2024年3月23日(土) 午後2時-4時

発表 四宮こころ

朗読 松田 裕子

【みすず書房：68頁～88頁】

オリヴィエとクリストフは再び彼らの生活の中に退いていた。確かに彼らの位置は社会革命運動の中にはなかった。オリヴィエがその運動から遠ざかったのは、抑圧されている弱い人々の名において(※①)であり、クリストフは独立的な強い人々の名においてだった。

彼は民衆と言う大桶の中へ身を浸すことが好きだった。そうすると気持ちがあつろいだ。そしてその沐浴から出てくると、彼は一層陽気になり、晴れ晴れとしていた、

クリストフはオーレリーのレストランの奥の室にはいって、一つの革命歌を即興的に作曲したが、この歌はすぐに人々に歌われて、次の日には早くも数々の労働団体の中に普及した。彼の評判は悪くなかった。警察が彼に目をつけた。マヌースが知人の一人の若い警察官サヴィエ・ベルナルから聞き知った。「君たちのクラフトはあぶないへまをやりかけてるぜ。こんな革命の陰謀の中で一人の外人を—それもおまけにドイツ人を、とっつかまえることは、まんざら悪い気持ちでもなからうからね。」マヌースはクリストフに警告した。オリヴィエはクリストフに、慎重であってくれと切に頼んだ。

※①オリヴィエが交際を続ける府たちの労働者

・ゲラン：家具工（職業そのものを愛し、工芸品に対する強い理解力を生まれつき持つ）

彼は労働階級にも、どの階級にも、属していなかった。彼は彼だった。

知性的教養の全部は、五感と、眼と、手と、そしてパリの民衆の持ち前の、美に対する勘の良さによってできていた。こういう小市民は、フランスの最も聡明な種族の一つである。

この人々は肉体労働と健全な精神活動とのあいだい一つの美しい釣合いを実現しているからである。

・ユルトール：郵便配達夫（背の高い美男子、晴れ晴れとして陽気な様子）

家系はブルゴーニュの最も古い家柄の一つ。フランス革命のときに没落して大衆の泥池の中へ転落。祖先が極めて高い家柄だったことを悔やむこともなく、悪運に対する怨みは微塵もなかった。

民衆というものは一つの巨大な貯水池だ。過去の多くの河がその中に流れ込んで見えなくなり、未来の多くの河がその中から流れ出る。そしてこれらの未来の河は新しい別の名称で呼ばれはするが、しかしそれらは非常に多くのばあい過去の河と同じである。

・エマニュエル

心に一つの新しい変化が起こっていた。激しい知識欲、猛烈に本を読み、読書の後では疲れてぼんやりしていた。オリヴィエはそれに期待外れを感じ、全く鈍感なのだと思った。エマニュエルの愚かしさをクリストフに見られるのが恥ずかしかった。エマニュエルはクリストフを嫌っていたが、その理由はオリヴィエがクリストフを愛しているからだった。他人が師の心の場所を占めるのが我慢できなかった。

#### ◆近づいてくる「五月一日」

- ・クリストフは世間一般の臆病さをおかしがって笑っていた
- ・オリヴィエは「革命」の記憶と期待がブルジョワ層の人々の心に絶えず感じさせるあのかすかな戦慄の幾分が残っていることを知っていた。  
「流血への恐怖というものは一つの密やかな本能なのだよ。この本能は知っているのだ—」

#### ◆オリヴィエの予感

朗読① みすず書房：74 頁下段 9 行目～76 頁上段最終行

オリヴィエは彼の追憶の糸を、つむをたぐるように丹念にたぐっていた。

「子供の自分が再び見えてきた。汽車に乗って、故郷の町から出ていく。汽車は霧の中を走る。

母が一緒である。母は泣いている。アントワネットだけはその列車の箱の他の片隅に居る・・・」

彼には意思の力が欠けていた。彼は疲れていた。それに彼は知っていた —彼の心の中のまぼろしの薫りは、彼がそれらを書き留めよとするやいなやすぐに発散して消えてしまうことを。これまでいつもそうだった。芸術創作上のこんな無力さが、永いあいだ、オリヴィエの最大の悲しみの種だった。自分のうちにそんなにも豊かに生きているものを感じながら、その生命を表現の形によって救い取ることができないとは！今ではもうあきらめていた。花々が咲いていればそれでいい。それらが人人に観られてなくても、もう構わない。誰の手も届かず、摘むこともできない野の中の花々こそどの花よりも美しい。太陽の光を浴びて夢みている花々の野の浄福よ！— 太陽の光はおぼろであった。だが、おぼろな輝きの中でこそ、オリヴィエの夢の花たちは、最もみごとに咲くのだった。(みすず書房 77 頁引用)

「明日は<五月一日>だ」とエマニュエルはつけたして、その陰気な顔つきが輝いた。

#### ◆五月一日

- ・オリヴィエはこの朝は人々に接触することがどうも苦痛に思われた。  
一日中家に閉じこもっていたかった。
- ・クリストフ  
「そんなら僕はひとりで出かける。彼らの<五月一日>を僕は見に行く。  
こんばん僕がここへ戻って来なかったら、つかまったものと思いたまえ。」  
彼は出て行った。オリヴィエは追いかけてゆき、階段の上で追いついた。  
彼は親友を一人きりで生かせるのが心配だった。

リュクサンブール公園の鉄柵はしまっていた。天気は依然、霧がかかっており、ほの温かった。はっきりした陽光を見ない日々がずいぶんつづいていた！

・・・二人の友は腕を組み合って歩いた。彼らはほとんど話し合わなかった。彼らはほんとうに愛し合っていた。ほんのちょっとしたことを言うだけでも、二人の心には、親愛な、すぎこし方のいろいろなことがよみがえってくるのだった。ある区役所の前で立ち止まって晴雨計を見たが、それには上昇の気配が見えた。「明日は」オリヴィエが言う—「太陽の顔を見られるだろう」

「クリストフ！」とオリヴィエは頼むように言った・

クリストフは聴こえなかった。

「クリストフ！」

「何だい？」

「帰ろう」

「君は怖いんだね？」クリストフは言う。

クリストフはなおも先へ歩いた。オリヴィエは悲しそうにほお笑みながら後からついていった。

数列前方で、押し戻される群衆が一つの横木の形を作っている危険な圏内に、オリヴィエは彼の友のせむしの少年が、新聞販売小屋の屋根の上に昇ってじっとしているのに気づいた。

彼はオリヴィエを見つけて、かがやかしい視線をオリヴィエに注いだ。何を待ち受けているのか？

きつと来るはずのものを・エマニュエルだけが待っているのではなかった。その周りの人々も、奇跡を待ち受けていた！そしてオリヴィエがクリストフの姿を見てみると、クリストフもまた待ち受けていることがオリヴィエには見て取れた。

#### 朗読② みすず書房：84 頁上段 10 行目～85 頁上段 17 行

オリヴィエはオーレリーの家に運ばれてきていた。彼は意識を失っていた。うす暗い奥の室の寝室に寝かされていた。その寝室の足元に、せむしの少年が、恐怖と落胆とに打ちのめされて立っていた。マヌースはオリヴィエの負傷の様子をしらべ、そしてもはや助かる見込みはないとすぐに見定めた。そしてオリヴィエのことで気を揉むのは打ち切りにして、今度はクリストフのことを考えた。彼はクリストフが「革命」についてどう考えているのかを知っており、クリストフ自身の考えを合致していない一つの思想的立場のためにクリストフが冒している愚かしい危険から、マヌースはクリストフを脱出させたかった。

もしもクリストフがオリヴィエの死を知ったら、彼は分別をすっかりなくしてしまい、猛り狂って、殺し、そして殺されるだろう。マヌースはベルナルに言う。「今クリストフはすぐに行ってしまうなければ破滅だ。私が連れ出そう。」

#### 朗読③ みすず書房：87 頁上段 4 行目～88 頁最終